

西洋史研究者のためのパソコン活用入門

— 西洋史研究と Windows2000 —

古谷大輔

はじめに

1. Windows2000 とはなにか
2. Windows2000 を導入する
3. Windows2000 を利用する

おわりに

はじめに

西洋史研究でパソコンを利用する場合、これまで多くの人が日本語と欧米系言語との多言語環境の構築について悩まされてきたと思います。2000年2月に発売されたMicrosoft社のWindows2000（以下Win2000）は、本格的な多言語システムに対応したOSであるといわれています。しかしながらWin2000は主に企業用のOSとして紹介されるだけで、個人的な使用目的ではWindows95/98（以下Win95/98）が使われ続けています。そこで本稿は、Win2000という新たなOSの特徴を整理した上で、このOSが多言語処理を要する西洋史研究を進めるにあたって実践的なOSなのかどうかを具体的に検討することを目的としています。その際、Win2000の導入を説明する過程で、Windows内に蓄積されたファイルのバックアップ方法などの知識も紹介していきます。OSを取り扱うにあたって必要とされるこうした基本的な知識は、Win2000を使わない方にとっても、日常のパソコン管理に際して参考となる情報だと思われます。ただしOSはパソコン利用の根幹をつかさどるソフトウェアですから、これについて誤った操作をすると、最悪の場合パソコンに蓄積された情報を破壊してしまう可能性もあります。従って、Win2000を導入される場合でもそうでない場合でも、本稿で紹介する知識を活用される場合には、こうしたリスクを理解し慎重な準備を踏まえた上で、研究者各自の自己責任で実践されることをお願いします。

1. Windows2000 とはなにか

(1) さまざまな Windows

Win2000はWindows NT4.0の後継として開発が進められてきたOSです。Microsoft社のOSは、企業などを対象としたビジネス用途と個人を対象としたコンシューマー用途のものに大別されます。前者がこれまでWindows NTと呼ばれてきたもので、Win2000はこの最新版にあたります。後者はWin3.1、Win95、Win98と発展してきたものです¹。私たちにとって馴染み深い後者の系列は、プログラム互換性を重視してDOSと呼ばれる古いOSの構造を維持しながら、コンピュータに詳しくない人でも容易に操作できるものとして開発が進められてきました。しかしながら、これらのOSは、過去のプログラムの遺産が蓄積された結果、OSの動作が非常に不安定なものになってしまいました。それに対して前者のNT系のOSは、企業などでの利用を前提にOSの安定性やセキュリティ

機能の信頼性などを重視して、DOS 以来の OS とは全く別個に開発が進められてきました。従って両者は、同じ Microsoft 社の OS といえども根本的に仕組みの異なる OS です。Microsoft 社は、将来的に両者の OS 系列を一つに統合する戦略を打ち出しています。この戦略の中で Win2000 は、NT 系の安定した仕組みと Win98 系の使いやすさを融合させた OS として開発されました。ですから Win2000 は、OS 内部の仕組みが異なるとはいっても、操作などの点でこれまでの Win98 などとそれほど違和感なく使えるものとなっています²。

(2) Windows2000 の長所

【長所①】高い安定性

Win2000 の最大の特徴は、システムの安定度が高いことにあります。Win98 までの OS を利用している多くの人は、ワープロソフトや辞書ソフト、WWW ブラウザなどを同時に起動して作業している最中に、一度ならずとも OS のフリーズに遭遇したり、再起動を要求するブルースクリーンのエラー画面を見たりしたことがあると思います。Win98 までの OS では、特定のアプリケーションがエラーを起こすと OS の動作も同時に停止してしまい、システム全体の再起動が要求されます。これは Win98 までの OS によるメモリの管理方法に問題があるために起こります。Win98 までの OS では、OS とアプリケーションの利用するメモリ空間が一緒になっています。ですから、アプリケーションが不具合を起こすと OS にまで不具合が及んでしまうわけです。一方、Win2000 では、OS とアプリケーションのメモリ空間を論理的に分割して管理しています。その結果、Win2000 上のアプリケーションが不具合を起こした場合、「Ctrl + Alt + Del」を入力することで、不具合を起こした特定のアプリケーションのみを強制的に終了させることができるので、OS 自体は安定して動作し続けます。

また Win2000 は、OS が管理するアプリケーションの作業領域に関しても変更が加えられています。Win98 までの OS は、上述したように DOS 以来の古い OS の構造を引き継いでいます。DOS や Win3.1 では、OS がアプリケーションを動作させるために確保するメモリ上の作業領域が非常に狭く制限されていました³。Win95/98 でも、DOS 以来のプログラム互換性が重視された結果、このメモリ上の作業領域の制限が引き継がれることになってしまいました。そのため、複数のアプリケーションを起動させると作業領域の不足が起きて、Win95/98 の動作が不安定になってしまいました。一方の Win2000 では、こうしたメモリ上の作業領域における制限がありませんから、複数のアプリケーションを同時に起動させていても動作が不安定になることはありません。そのほかにも Win2000 には、アプリケーションの導入時などに OS のシステムファイルが不用意に置き換えられてしまうことを自動的に防ぐ機能など、システムを不安定にさせる要因を取り除く新たな機能が付加されています。

【長所②】多言語環境の充実

次に、Win2000 の新たな特徴として、多言語環境に本格的に対応した OS であるという点があげられます。これは、西洋史研究者にとって Win2000 を利用する最大のメリットです。NT 系の OS は、システム内部では文字列を Unicode で管理しているため、日本語

以外の言語によるアプリケーションを動作させたり、それら言語の文字を入力したりすることができます。コンピュータはあらゆる情報を数値化して処理しています。文字に関しても、ある特定の文字に対してその文字固有の数値が設定されることで情報処理が行われています。この数値化された文字の体系を文字コードと呼びます。従来 OS 上での日本語環境は、Shift JIS や JIS、EUC といった日本語独自の文字コードが設定されていました。従って、これらの日本語文字コードに設定されていないヨーロッパ言語の特殊文字は、日本語 OS 上で文字化けを起こしたりしていたわけです。これに対して Unicode は、世界中のあらゆる言語の文字管理を目的に設定された文字コードセットです。Win2000 では、OS 内部での文字管理に Unicode を採用しています。ですから、それぞれの文字を表示可能にするフォントが OS に導入されていれば、フランス語版のアプリケーションでもドイツ語版のアプリケーションでも、全てを日本語版 Win2000 上で実行できます。逆に、英語版の Win2000 の上で日本語を入力したり、日本語版のアプリケーションを実行したりすることもできます。

【長所③】セキュリティ機能の強化

Win2000 のもう一つの特徴は、セキュリティ機能が Win98 までの OS に比べて大幅に強化されていることにあります。これは、NT 系の OS がネットワークでの使用を前提に開発されたことに関係があります。複数のユーザーが利用するネットワークにおいては、自分の利用しているコンピュータシステムを保護することが重要になってきます。ですから、Win2000 では、ユーザーごとに特定ユーザーが行える操作を限定したり、デスクトップや WWW ブラウザのブックマーク（お気に入り）などを別のものとして用意したり、アプリケーションの設定を個別に保存したりすることができます。また、安易に部外者によってシステムを書き換えなどが行われないように、システム設定を変更できる実行権限が Administrator として登録された者のみに限定されています。さらに、NT 系 OS 独自のファイルシステムである NTFS という形式でファイル管理を行うと、ファイルを他のユーザーが勝手に閲覧したり、書き換えたりできないように保護することもできます⁴。これらのセキュリティ機能は、ネットワークにつないで利用していない人にとっても利点があります。たとえば、各自が利用しているノートパソコンが紛失したとしても、厳密に設定されたユーザー名とパスワードを入力しなければ、コンピュータ内のデータが第三者に漏洩する可能性はほぼありません。

【長所④】インターフェイスの改善

また Win2000 では、Win98 以上に、細かな点でのユーザーインターフェイスの改良が行われています。従来の NT 系 OS の短所だった設定の難しさは、MMC (Microsoft Management Console) と呼ばれる設定画面が加えられたことでほぼ解消され、MMC からシステム全体の設定を行う事ができるようになっています。さらにこれまでの NT 系 OS にみられた最大の欠点である周辺機器の増設設定の困難さも、USB などの新しいハードウェア規格を含めて Plug & Play にも対応した結果、著しく改善されました⁵。そのほかにも、メニュー表示が使用頻度の高い項目を優先的に表示するようになっていたり、マウスポインタに影が表示されることでその視認性が高まっていたり、自動的にマウスポインタが OK ボタンなどの上へ移動したりする機能などが加わっています。

(3) Windows2000 の短所

【短所①】 Windows95/98 にはない新たな概念

このような長所のある Win2000 ですが、その使用にあたっては短所もいくつか見受けられます。まず、上述したように Win2000 は、高度なセキュリティ機能を有した OS ですが、それに応じて Win98 までにはなかった独特な概念を覚えてシステム全体を管理する必要があります。第2章で詳述しますが、たとえば Win2000 を使用できるユーザーは、OS 全体の設定変更について実行の権限をもつ「Administrator」、OS の各種設定変更はできないがアプリケーションの導入は可能な「Power User」、アプリケーションの導入さえ不可能な「User」の三つのカテゴリに分けられており、それぞれのユーザーが属するカテゴリとパスワードを逐一設定する必要があります。

【短所②】 周辺機器やアプリケーションの対応状況

また Win2000 がそれまでの OS との互換性を排して新たに開発されてきた NT 系の OS であることから、現時点ではプログラム構造上の制限から動作しないソフトウェアもいくつか存在します。とりわけ DOS や Win3.1 で動作するアプリケーションの互換性は、圧倒的に Win98 のほうが高いです。この問題については、第3章であらためて触れたいと思います。この問題と関連して、現時点では Win2000 に対応したドライバの用意されたハードウェアが少ないことも、Win2000 の使用にあたっての短所といえるでしょう。Win2000 で周辺機器を動作させるために必要なドライバは、Win95/98 のものとはまったく別なものになってしまいました。とはいえプリンタやスキャナなどの周辺機器については、開発メーカーの多くが Win2000 への対応を表明していますから、それぞれのメーカーのホームページなどで対応状況を各自確認してください。

【短所③】 Windows2000 が必要とするハードウェア性能

次に、Win2000 は軽快に動作する OS として完成されてはいるものの、それを快適に動作させるためには、より高いハードウェア性能が要求されます。Win2000 は、Win98 よりもメモリなどのシステム資源の消費量が大きいです。この点が、古いハードウェアを利用している人にとっては大きな問題になります。Win2000 を導入するために必要とされるハードウェアの最低条件は、CPU は Pentium133Mhz、メモリは 32MB、HDD 容量は 850MB となっています。Win2000 の動作にあたっては、CPU の性能はそれほど問題になりませんが、作業領域を確保するメモリ容量は重要な条件となってきます。快適に動作させるために、Microsoft 社はメモリの 64MB 以上実装を推奨しています。しかしながら、実際には、メモリを 64MB 実装しているパソコンでも「仮想メモリが不足している」という警告が頻発します。筆者の個人的な経験から判断すると、メモリを 96MB 以上搭載して、はじめて安定かつ快適に Win2000 を動作させることができるようです。このようにハードウェア性能に求める要求度が高い点については Win2000 の欠点といえるのですが、そのかわりメモリさえ十分な余裕をもって増設されてあれば、Win2000 自体やワープロ・表計算といったアプリケーションの起動時間は Win98 よりも格段に短縮される点を補足して紹介しておきます。

2. Windows2000 を導入する

(1) Windows2000 導入前の準備

この章では、実際に Win2000 をパソコンに導入する過程を整理します。

まず Win2000 の導入にあたって、三つの導入方法を紹介します。Win2000 には、①これまで使っていた Win95/98 に直接 Win2000 を上書きインストールする「アップグレードインストール」、②これまで使っていた Win95/98 の環境を残したまま、HDD 上の D ドライブ (D:¥) など⁶、Win95/98 が導入されているものとは別のドライブに Win2000 を導入して、それぞれの OS を使い分けることのできる「新規インストール」、③これまで使っていた Win95/98 の環境を削除しフォーマットされた HDD に Win2000 をインストールする「クリーンインストール」の三つの導入方法があります。

①の「アップグレードインストール」は、既存の Win95/98 の環境を Win2000 に引き継いで利用することができるため、新たに環境設定をし直す作業量が少ないことが利点です。また後述する「新規インストール」に比べて、少ない HDD 空き容量で導入が可能です。しかしながら、この方法では、一度 Win2000 を導入してしまうと、元の Win95/98 の環境に戻すことは不可能です。また、現時点では既存の Win95/98 で動作していたアプリケーションや周辺機器が Win2000 で動作しないものもありますから、そうした不具合が発生する可能性が高い方法です。

②の「新規インストール」は、コンピュータの起動時に Win95/98 と Win2000 のいずれを起動させるかを選択できる方法です。現時点では、Win95/98 でしか動作しないアプリケーションや周辺機器もありますので、通常は安定した Window2000 で作業を行い、Win95/98 でしか動作しないアプリケーションや周辺機器を動作させたいときに Win95/98 を起動させるなどの方法をとることができます。また、Win2000 の導入後に不具合が生じた場合でも、この方法でインストールした場合には、Win2000 を削除して、既存の Win95/98 の環境のみに復帰させることができます。しかしながら、この方法では、Win2000 を新規に導入するために、インストール後に周辺機器の再設定やアプリケーションの再導入などの環境移行作業が必要になります。また既存の環境のほかに Win2000 用の空きドライブを必要とすることから、Win95/98 が導入されているものとは別のドライブが設定されていない場合には HDD 内に新たなドライブを作成する必要があります。その結果、ほかの導入方法に比べて、HDD の空き容量がより多く必要とされます。最低限の目安としては、Win95/98 に 2GB の HDD 容量を、Win2000 専用に 2GB の HDD 容量を確保することが必要です。

③「クリーンインストール」は、ほかの導入方法に比べて導入に必要な HDD 容量はもっとも少なくすみます。HDD 容量が 2GB 未満のものでも十分に導入が可能です。またフォーマットされた環境に導入するために、既存の Win95/98 で発生していた不具合も無縁のものとなります。しかしながら、この方法では、メールやアドレス、日本語変換ソフトのユーザー辞書などといった既存の Win95/98 から継承したいデータがある場合、Win2000 の導入前にそれらの完全なバックアップ作業が必要になります。また、まったく新たに Win2000 を導入することから、導入後、周辺機器の再設定やアプリケーションの再導入などの環境移行作業が必要になりますし、バックアップしたデータを復元する作業も必要になります。さらに、サブノートパソコンなど CD-ROM ドライブが内蔵され

ていないパソコンへ「クリーンインストール」する場合には、電源スイッチを入れた後にパソコン側でCD-ROMドライブの接続を認識してくれるCD-ROMドライブを用意しないとWin2000の導入作業は困難になります。

第1章でも述べたように、Win2000に対応していない周辺機器やアプリケーションが存在する現時点では、②の「新規インストール」の方法で導入するのが安全です。また、この方法をとれば、Win2000を削除して元のWin95/98の環境に復帰することも容易ですから、②の「新規インストール」の方法を本稿では推奨します。従って、本稿では、②の「新規インストール」によるWin2000の導入方法を紹介します。

さて、私たちが実際に用意すればよいWin2000は、Win2000Professional版です。一般的にWin2000Professionalには通常版とアップグレード版が販売されていますが、私たち研究者は大学生協などで販売されているアカデミック版アップグレードパッケージのWin2000Professionalを購入することをお奨めします。アカデミック版は値段が安く設定されているというだけでなく、上述した三つの導入方法のすべてに対応しているからです。Win2000Professionalアカデミック版を用意したら、いよいよパソコン側での導入準備作業に移ります。

【準備作業①】既存のWindows95/98のデータをバックアップする

まずこれまで使ってきたWin95/98の環境で消去されては困るデータのバックアップを作成します。ここで必ず保存しておきたいデータは、研究上作成・保存してきた文書データ、WWWブラウザのブックマーク、メール、日本語入力ソフトのユーザー辞書、インターネット接続あるいはLAN接続の各種設定です。

文書データは、各自が保存しているフォルダ（ディレクトリ）からフロッピーディスクなどに保存すれば十分です。

WWWブラウザのブックマーク（お気に入り）のデータは、Netscape CommunicatorをC:\ProgramFiles\Netscapeに導入して利用している場合には、C:\ProgramFiles\Netscape\Users\（各ユーザー名）にあるbookmark.htmlをフロッピーディスクなどに保存してください。またInternet Explorerを利用している場合には、C:\Windows\Favoritesにあるファイルをすべて保存してください。

受信したり、送信したりしたメールとメールアドレスのデータは、各自が利用しているメールソフトの解説に従ってフロッピーディスクなどに保存してください。たとえばOutlook Express 4を利用している場合には、送受信したメールデータはC:\Windows\ApplicationData\Microsoft\OutlookExpress\Mailにあるファイルとフォルダを、アドレスデータはC:\Windows\ApplicationData\Microsoft\AddressBookにある（各ユーザー名）.wabというファイルを保存してください。Outlook Express 5の場合には、メールデータはC:\Windows\ApplicationData\Microsoft\Identities\（英数字の文字列）\Microsoft\OutlookExpressにある、拡張子が.dbxのファイルをすべて、アドレスデータはC:\Windows\ApplicationData\Microsoft\AddressBookにある（各ユーザー名）.wabというファイルを保存してください。Netscape Communicatorの場合には、メールデータはC:\ProgramFiles\Netscape\Users\（各ユーザー名）\mailにあるファイルをすべて、アドレスデータはC:\ProgramFiles\Netscape\Users\（各ユーザー名）にあるpab.na2というファイルを保存してください。

日本語変換ソフトのユーザー辞書データは、Atok12/13をC:\¥Justに導入して利用している場合には、C:\¥Just¥Atok12 (13の場合にはC:\¥Just¥Atok13)にあるAtok12u1.dic (同じくAtok13u1.dic)を保存してください。MS-IME98を利用している場合には、C:\¥Windows¥ime¥imejp98¥userdictsにあるmeime98.dicを、MS-IME2000を利用している場合には、C:\¥Windows¥ime¥imejp¥userdictsにあるimejpusr.dicを保存してください。

以上のメール、アドレス、ユーザー辞書といったデータは、Win2000を導入し、それぞれのメールソフト、日本語変換ソフトを再導入した後、それぞれのアプリケーションの指示に従って、保存したファイルからデータを再構築してください。たとえばOutlook Expressの場合には、「ツール」メニューにある「インポート」機能で保存したファイルを指定すれば、再構築ができます。また日本語変換ソフトについて、Atokの場合には、「辞書ユーティリティ」の「辞書合併」を使い、「読み出し辞書」で保存した辞書データを指定し、「書き込み辞書」で新しい辞書ファイルを指定すれば、辞書データの移行は完了します。MS-IME98/2000の場合には、「単語/用例の登録」から「辞書ツール」を起動し、「ツール」メニューから「MS-IME辞書からの登録」を選択し、そこで開いたウインドウ上で保存した元の辞書データを指定すれば、辞書データの移行ができます。WWWブラウザのブックマーク（お気に入り）データは、Win2000を再導入した後、それぞれ保存先の場所に上書きすれば、もとの情報が再構築されます。

さらにバックアップすべき重要なデータは、メールソフトのアカウント情報やダイヤルアップ接続やLAN接続の情報です。メールソフトのアカウント情報は、それぞれのメールソフトに応じてメモしておいてください。ダイヤルアップによるインターネットへの接続情報は、「マイコンピュータ」から「ダイヤルアップネットワークの設定」を開き、各自が接続しているプロバイダへの接続情報のプロパティを開いて、IPアドレス、DNSサーバー、プロバイダへの接続電話番号、パスワードなどをメモしてください。またLAN接続の情報の場合には、「コントロールパネル」から「ネットワークの設定」を開き、さらに「TCP/IP プロトコル」のプロパティを表示させ、IPアドレスやDNSサーバー、ゲートウェイなどをメモしてください。Win2000の導入後は、これらのデータをもとに、ダイヤルアップやネットワークの再設定を手動で行います。

【準備作業②】 ハードウェアやアプリケーションの対応情報を確認する

Win2000を導入する前に、各自が利用しているパソコンや周辺機器、アプリケーションがWin2000に対応しているかどうかを、インターネット上で確認しておきます。各社の対応状況は基本的には、Microsoft社が設営しているWindows2000.com (<http://www.win2000j.com>)で確認できます。Microsoft社では、Win2000を導入する前に、あらかじめアプリケーションや周辺機器がWin2000に対応しているかをWin95/98上で確認するユーティリティを配布しています。これは「Win2000対応アナライザ」というもので、<http://www.microsoft.com/japan/windows2000/upgrade/compac/ready.asp>でダウンロードすることが可能です。このユーティリティを使って、現在使用しているアプリケーションや周辺機器の動作を確認します。しかしながら、Windows2000.comやアナライザを使っても表示されないメーカー情報が多々存在します。ですから、最終的には、各自が利用しているパソコンや周辺機器、ソフトウェアなどのメーカーのホームページを見て、インストール時の注意事項やWin2000用の修正ファイルなどをあらかじめ確認しておく必要

があります。少なくとも、CD-ROMドライブやモデムなどの対応状況は確認しておきたいものです。Win2000用の修正ファイルなどは、Win95/98上でもダウンロードすることが可能です。こうした導入前の対応状況の確認作業で特に重要な点は、それぞれのパソコンで使われているBIOSがWin2000に対応しているかどうかです。BIOSとは、OSとは違って、パソコン自体に刷り込まれたハードウェアの管理情報のことです。BIOSがWin2000に未対応の場合には、各社のホームページで必ずWin2000に対応したBIOSがダウンロードできるようになっています。BIOSが未対応の場合には、それぞれのホームページの情報に従って、Win2000の導入前にBIOSをアップグレードさせてください。なお、このBIOSは、OSとは異なりパソコン内部のメモリチップに直接書き込まれる情報です。BIOSのアップグレード作業は、HDDではなくこのメモリチップの情報を書き直す作業になりますから、失敗した場合にはやり直しができません。従ってBIOSのアップグレード作業に失敗した場合には、そのパソコンはどのような方法でも起動できなくなり、一切利用できなくなってしまうます。ですから、このBIOSのアップグレード作業は、各社の指示に従って十分な注意を払って行うようにしてください。

【準備作業③】 ハードディスクの空き容量を確保する

次に、現在利用しているパソコンのHDDにWin2000を導入するための空き容量を確保します。本稿では「新規インストール」での導入方法を紹介しますので、HDD上にWin95/98が導入されているものとは別のドライブを作成する必要があります。マイコンピュータを開いてみて、Cドライブのほかに、あらかじめほかのドライブ（DドライブやEドライブなど）が作成されている場合には、そのほかのドライブに最低でも850MB以上、できれば1GB以上2GB程度の空き容量があるかを確認します。もしCドライブのほかに「マイコンピュータ」でみてほかのドライブがない場合には、Cドライブを分割してDドライブやEドライブなど新たなドライブを作成する必要があります。この作業を、「HDDのパーティションを分け直す」といいます。本来ならばパーティションを分割するには、Win95/98を利用するにあたって必ず作成しておかなければならない起動ディスクを使ってパソコンを起動しなおし、そこで現れる画面に「FDISK」と入力して、ドライブを削除したり作成したりする作業を進めなければなりません⁷。しかしこの「FDISK」という作業はHDD全体の情報を変更してしまうために、確実にHDDにあるWin95/98のデータを破壊し、起動できなくさせてしまいます。ですから、決して起動ディスクを使ってパーティション分割を行ってはいけません。そこで、起動ディスクを使わずに、Win95/98上でHDDのパーティションを分割・作成できるアプリケーションを利用します。これらのパーティション分割ソフトとしては、「Partition Magic」や「B' Crew」などが知られています。Win2000を導入する必要がなくても、HDD上のドライブをWin95/98用にCドライブ、各種アプリケーション用にDドライブ、文書・画像などのデータ保存用にEドライブといったようにHDDを分割して管理しておけば、たとえOSやアプリケーションが破壊されたとしても、別のドライブに保存されている文書データなどは保護されるという利点があります。ですから、HDDのパーティションを区切っていない方は、以上のようなアプリケーションを使ってドライブを新たに作成し、HDDを管理することをお奨めします。

さて、「Partition Magic」や「B' Crew」などを使ってWin2000用に新たにドライブを

1GB～2GB程度作成したら、それらのソフトを使って新規に作成したドライブを初期化（フォーマット）します。このとき、Win95/98が導入されているCドライブや文書データを保存させているドライブを初期化しないように、十分に注意してください。この作業の過程で指定を要求されるフォーマットの形式は、FAT16、FAT32のどちらの形式でもかまいません。この初期化作業を経て、はじめてWin2000を導入できるドライブの準備が終了します。

【準備作業④】 Windows95/98 を起動する

各自のデータバックアップとWin2000導入に必要な情報確認を行い、HDD上にWin2000導入用のドライブを作成した後、Win95/98が正常に動作しているかどうかを確認します。ここで正常に動作している場合には、いよいよWin2000を導入する作業に移れます。このとき、円滑なWin2000の導入を行うためには、Win95/98で動作しているアンチウイルスソフトや仮想CDドライブソフトなどの常駐ソフトを、すべて停止させておく必要があります。

(2) Windows2000 の導入過程

【導入作業①】 導入方法を選択する

導入作業は、Win2000を「新規インストール」することを選択することからはじまります。まずWin95/98を起動させた状態で、Win2000のCD-ROMをCDドライブに入れます。そうすると「アップグレードしますか？」というメッセージができますので、「はい」と答えるとセットアップウィザードがはじまります。このメッセージがでてこない場合には、「マイコンピュータ」を開いてWin2000のCD-ROMを入れたドライブを開き、SETUP.EXEをダブルクリックすればセットアップウィザードがはじまります。

セットアップウィザードがはじまると、最初にインストール方法の選択をきかれます。このときWin95/98との併存が可能な「新規インストール」を行うためには、「Win2000を新規インストールする」を必ず選びます。次にライセンス契約が表示されるので、「同意します」をチェックして先に進みます。続いてプロダクトキーの入力画面が表示されますので、CD-ROMの入っていたケースの裏側にあるプロダクトキーを入力します。

【導入作業②】 インストール先などのオプションを選択する

次にインストール時に使われる言語やインストール先などの特殊オプションを設定する画面がでます。いずれも標準設定のまま、先へ進んでかまいません。「言語オプション」では通常使う第一言語と追加言語を選択できます。あらかじめ第一言語は日本語に設定されていますし、追加言語は後から設定することができるので、ここの設定を変更する必要はありません。「詳細オプション」では、インストール時のファイルのコピー元と、Win2000を導入するコピー先のフォルダを指定できます。コピー元はまったく変更する必要はありませんが、Win2000の導入先のフォルダは、各自が導入しようとしているドライブ（Dドライブに導入しようとしている場合ならば、D:¥WINNT）に設定されているか確認してください。また、ここでノートパソコンなどにCD-ROMドライブを使ってWin2000を導入する場合には、「セットアップファイルをハードディスクにコピーする」を選択します。「ユーザー補助オプション」は、全く変更する必要はありません。

【導入作業③】 ファイルのコピーとキーボードの設定

以上の作業が終わるとWin95/98上でインストールに必要なファイルのコピーがはじまります。ここでは設定することはなにもありません。一通りコピーが終了すると、Win95/98が終了し再起動されます。再起動すると背景がブルーの画面になって、インストール作業が続行されます。インストール作業を続行する場合には、再起動後「Enter」キーを押します。その次にキーボードの種類を選択します。日本語キーボードを使っている場合には、106キーボードと呼ばれるものなので「半角/全角」キーを入力します⁸。英語キーボードの場合には、101キーボードなので「スペース」を入力します。

【導入作業④】 Windows2000の導入ドライブとファイルシステムを指定する

次にWin2000を導入可能な空き容量のあるドライブが表示されるので、準備作業で用意したドライブ（絶対にWin95/98が導入されているCドライブに導入してはいけません）を選択します。その後で、導入するドライブのファイルシステムを選択します。第1章でも述べたように、Win2000ではより高度な信頼性をもってHDDのファイル管理を行えるNTFSというファイルシステムと、Win95/98で利用されてきたFAT16/FAT32というファイルシステムの両方を選択することができます。しかしながら、「新規インストール」する場合には、Win95/98からWin2000が導入されているドライブを参照できないNTFSにするよりは、参照可能なFAT16/FAT32のファイルシステムを利用しつづけるべきです。ですから、ここでは「現在のファイルシステムをそのまま使用」を選択します。先の準備作業で行ったドライブのフォーマット形式がFAT16かFAT32かによって、FAT16かFAT32かが選択されます。

ファイルシステムの選択が終わると、ハードディスクの検査とインストールに必要なファイルのコピーがはじまります。この作業がしばらく続いた後、パソコンは再び再起動されます。この間、作業することはなにもありません。

【導入作業⑤】 Windows2000 セットアップウィザードに従って設定作業を進める

二度目の再起動がすむと、ブルーの画面が終了し、再びカラフルな画面に復帰し、「Windows2000セットアップウィザード」がはじまります。最初、キーボードやマウスなどのデバイスを自動検出してWin2000に対応したドライバをインストールする作業が自動的に行われます。これにはしばらく時間がかかりますので、この間はパソコンに触れずデバイスのインストール作業が終了するのを待ちます。

デバイスの自動インストールが終了すると、次に「地域」の設定に移ります。ここでロケールという言葉が、新たに登場します。ロケールとは、各国で異なる言語や日付、時間、通貨単位の表示形式や入力方法などの設定のことです。標準の設定では、日本語とMS-IME2000が選択されています。ほかの言語や入力システムへの設定は、後から可能ですので、インストール時には標準設定のままでかまいません。

次に「ソフトウェアの個人用設定」が表示されますので、「名前」と「組織名」を入力します。「名前」は必須ですが、「組織名」は入力しなくてもかまいません。また名前は漢字でも英数字でも可能です。

その後に「コンピュータ名とAdministratorのパスワード」を入力します。コンピュータ名は、ネットワーク上で使うものを入力します。ですから、ネットワークに接続させ

る必要がない場合には適当でかまいません。しかしながら、「Administratorのパスワード」の設定はとても重要な作業で、必ず入力しなければなりません。Administratorは、第1章でも述べたようにWin2000全体の設定を変更できるユーザーのことです。ここで設定したパスワードを忘れてしまうと、Win2000の設定やアプリケーションの導入ができなくなってしまうので注意してください。

次に「日付と時刻の設定」に移ります。通常では、正常な時刻とタイムゾーン（大阪、札幌、東京）が選択されているので、そのまま次へ進みます。日付と時刻に関しては、後から設定しなおすことも可能です。

続いてネットワークソフトのインストール作業がはじまりますので、この間しばらく待ちます。これが終わると「ネットワークの設定」画面が表示されます。ここでLANカードが増設されていない場合には、そのままコンポーネントのインストール作業へ移行します。

LANカードが増設されている場合には、「カスタム設定」を選択し、各自が準備作業で記録しておいたネットワークの設定に従ってIPアドレスやDNSなどを入力します。これらの作業がわからない場合には、「標準設定」を選択して先へ進み、Win2000が導入された後に「コントロールパネル」の「ネットワーク」から設定することもできます。さらにLANカードが増設されている場合には、「ワークグループまたはドメイン名」の設定画面が表示されます。これもわからない場合には、「このコンピュータはネットワーク上にはないか、ドメインのないネットワークに接続している」を選択して先に進み、後ほどそれらの設定を各研究機関のネットワーク管理者にたずねてから設定することができます。これらの作業が済んだ後、コンポーネントのインストール作業が自動的にはじまります。

「コンポーネントのインストール」が自動的に終了すると「最後のタスクの実行」がはじまります。この作業も自動的に進行しますので、この間しばらく待ちます。この作業が終了すると、一連のセットアップウィザードによる作業は終了します。「完了」を押して、パソコンを再起動します。

【導入作業⑥】 ユーザー名とパスワードを設定する

三度目の再起動が終わると、「Windows2000Professional」という起動画面が表示され、「ネットワーク識別ウィザード」がはじまります。まず各自のコンピュータを利用するユーザー名とそのパスワードを設定します。ここでは、起動する度に毎回ユーザー名とパスワードを入力するかどうかを決定します。一人のユーザーだけで利用し、セキュリティを考慮する必要がない場合には、「常に次のユーザーがコンピュータにログオンすると仮定する」を選択し、そのユーザー名とパスワードを入力します。その際、先に設定したAdministratorでログオンしてもかまわない場合には、ユーザー名を「Administrator」にしてパスワードをそのときに設定したものと同じく入力することもできます。

以上で「新規インストール」の方法による導入作業は完了します。「新規インストール」の場合、Win2000が最初に起動したときには、画面の解像度が640×480ドットという狭いものに設定されていますので、「コントロールパネル」の「画面」のプロパティを開いて、「設定」で各自が利用しているディスプレイの解像度に変更します。

この後、Win2000を終了し、再びパソコンを起動させると、Win2000を起動するのか、既存のWindowsを起動するのかを選択する画面が表示されるようになります。各自の用

途に応じて、Win2000あるいはWin95/98の起動を選択してください。標準では、Win2000が自動的に起動するように優先設定されていますが、Win95/98の起動を優先させたい場合には、一度Win2000を起動させた後、「コントロールパネル」の「システム」を開き、「詳細」を選択してその中にある「起動/回復」ボタンを押します。ここで表示された画面の「規定のオペレーティングシステム」の右側にある矢印キーを押すと、「Microsoft Windows」が表示されますからそれを選んで「OK」を押すと、次の起動からはWin95/98が優先的に起動するようになります。

(3) Windows2000 導入後の設定

【導入後の設定①】 ユーザー管理について

Win2000を導入した後、最初に設定しなければならないことは、ユーザーの管理についてです。Win2000は、企業ネットワークなどでつながれた複数のユーザーが利用することを想定して開発されたOSです。そのためにユーザーごとにログオン用の名前とパスワードを割り当てる必要がでてくるわけです⁹。Win95/98しか利用したことがない場合、もっとも戸惑う点はこのユーザー管理の設定にあります。Win2000を利用できるユーザーの管理は、「コントロールパネル」の「ユーザーとパスワード」によって設定することができます。ユーザーの種類は先にも述べたとおり、「Administrator」「Power Users」「Users」にわかれますが、周辺機器の設定やアプリケーションの導入など、一通りの環境構築を終わらせるまでは、システム変更からファイルの読み書き、アプリケーションの導入と削除など、すべての操作が可能な「Administrator」でWin2000にログオンして作業を進めます。導入過程の最後のところで、「常にログオンするユーザー」の名前を「Administrator」に設定しなかった場合には、「スタート」から「Windowsの終了」「ログオフする」を選択し、ユーザー名とパスワードの入力画面で「Administrator」と先にAdministrator用に設定したパスワードを入力し、Administratorの権限でWin2000を再起動させれば、Administratorの立場で周辺機器の設定やアプリケーションの導入といった作業を進めることができます。この際、パスワードを忘れてしまうとWin2000をまったく利用できなくなってしまうので、十分な注意が必要です。Win2000では、Win95/98とは違い、「コントロールパネル」の「ユーザーとパスワード」によって登録されたユーザー名とパスワードがないと全く利用できなくなり、再びWin2000をインストールしなければなりません。

【導入後の設定②】 周辺機器とアプリケーションの導入

Administratorの権限でWin2000に再ログオンをした後、これまで使っていた周辺機器やアプリケーションの導入を行います。プリンタやモデム、スキャナなどの周辺機器は、準備作業のときに用意しておいたWin2000用のドライバを使って認識させていきます。このとき、Win2000自体があらかじめそれらの周辺機器に対応したドライバをもっている場合には、導入作業におけるハードウェアの検出の過程で、自動的に周辺機器も認識されている筈です。そうでない場合には、少なくともCDドライブとモデムだけは、最初の段階で確実に認識させておきたいものです。そうでないと、アプリケーションの導入やインターネットへの接続ができなくなってしまうからです。

ワープロや表計算、データベース、メールなどのアプリケーションの導入作業は、Win95/98 のときと同じように行うことができます。ただし各アプリケーションの Win2000 への対応状況は現時点では完全であるとは言いきれません。導入さえできないアプリケーションも中には存在します。Administrator の権限で Win2000 を利用しているにもかかわらず、アプリケーションの導入ができない場合には、ほとんどが Win2000 に対応していないアプリケーションであることが原因と考えられます。第3章でいくつかのアプリケーションについては検証しますが、先にも述べたように Win2000 を導入する前には、各自が利用しているアプリケーションの対応状況を必ず確認し、Win2000 用の修正ファイルをあらかじめダウンロードしておく必要があります。

【導入後の設定③】 ネットワークへの接続の設定

ネットワークへの接続の設定は、インターネットを利用する際に最初に行わなければならないものです。モデムを使って電話回線でインターネットに接続している場合には、デスクトップ上につくられている「インターネットに接続」というアイコンをダブルクリックします。そこで「ネットワーク接続ウィザード」が起動しますので、それに従って設定を行います。たいていの場合には、「インターネットにダイヤルアップで接続する」を選択した後は、Win95/98 でのダイヤルアップ接続の過程と同じように、プロバイダの電話番号などを入力する手続きを踏みます。これらの過程は、「コントロールパネル」のなかにある「ネットワークとダイヤルアップ接続」の「新しい接続の作成」という箇所から設定することもできます。

研究機関などの LAN に接続してインターネットを利用する場合で、Win2000 の導入過程においてネットワーク設定を「標準設定」や「このコンピュータはネットワーク上にないか、ドメインのないネットワークに接続している」に選択した場合には、「コントロールパネル」の中にある「システム」を開き、「ネットワーク ID」を選択します。そして、そこに表示されている「プロパティ」を選択して、コンピュータ名とワークグループ名を設定します。次に「ネットワーク ID」を選択して、「ネットワーク接続ウィザード」に従い、LAN 接続のためのユーザーアカウントやドメイン、パスワードなどを設定します。さらにデスクトップ上にある「マイネットワーク」を右クリックしてあらわれるメニューから「プロパティ」を選択し、「インターネットプロトコル (TCP/IP)」のプロパティを表示させます。その画面から IP アドレスや DNS サーバーのアドレスなどを設定できます。その後で、「コントロールパネル」の「インターネットオプション」のなかにある「接続」の中から、「接続」を選択し「インターネット接続ウィザード」を起動させます。その画面から「LAN を使って接続する」項目を選択した後で、ウィザードに従って設定すれば、LAN 経由でのインターネットアクセスも可能になります。LAN への接続に関しては、それぞれの設定を、各自が所属する研究機関のシステム管理者にたずねることをお勧めします。

【導入後の設定④】 Windows2000 がトラブルを起こした場合の設定

Win2000 がトラブルを起こした場合の設定を簡単に整理しておきます。まず、インストール作業のブルースクリーン画面の過程でインストール作業が停止してしまった場合には、一端パソコンを再起動した後、ブルー画面の左上に「Windows2000 Setup」と表示

されている時点で「F5」キーを押します。そこで表示された選択画面の中から「Standard PC」を選んで「Enter」キーを押します。こうすると、このブルースクリーン画面でのハングアップは回避できます。それでもハングアップする場合には、パソコン自体がまったくWin2000に対応していないことが考えられますので、各パソコンメーカーに質問してください。

Win2000の導入後、なんらかの不具合が頻発する場合や周辺機器の多くがWin2000に対応していない場合、あるいは研究上必要なアプリケーションがWin2000上で動作しない場合など、Win2000が不必要になった場合には、Win2000のみを削除して元のWin95/98の環境に復元することが可能です。この作業では、Win2000が導入されたときに作成された起動プログラムを、Win95/98の起動プログラムに書き直す必要があります。この作業を行うためには、Win95/98の「コントロールパネル」にある「アプリケーションの追加と削除」で「起動ディスク」を選択して作成される起動用ディスクが必要です。この起動用ディスクを作成した後、一旦Win95/98を終了し、起動用ディスクをフロッピーディスクドライブに挿入してから電源を入れ直します。「a:¥」という表示が現れたら、そこに「sys c:」と入力して「Enter」キーを押します。その作業が終わったら、起動用ディスクをフロッピーディスクドライブから引き抜いて、一旦電源を切ります。その後でパソコンを起動させると、自動的にWin95/98がはじまります。Win95/98が完全に立ち上がったら、「マイコンピュータ」や「エクスプローラ」を開いて、Cドライブ(C:¥)にあるboot.ini、bootfont.ini、ntdetect.com、ntldrの四つのファイルを削除します。その後、Win2000を導入したDやEなどのドライブ(D:¥やE:¥)を初期化すればWin2000は完全に削除されます。

3. Windows2000を利用する

(1) 研究上必要なアプリケーションの動作

たとえ第2章で説明した過程に沿ってWin2000を無事に導入できたとしても、現時点でWin2000が西洋史研究において有益なOSか否かを判断する基準は、これまでWin95/98で利用されてきたアプリケーションが円滑に動作するか否かにあるといえます。そこで、研究上必要な基本的アプリケーションの動作状況を確認したいと思います。

まずMicrosoft社のOffice95/97/2000（それぞれワープロソフトのWord、表計算ソフトのExcel、データベースソフトのAccessなどを含む）は、基本的にWin2000に完全対応しています。Excel97では、HTML形式でファイルを保存する場合に、Word2000やExcel2000では、Webフォルダ機能を利用してhttpサーバーへファイルを保存する場合に不具合が報告されています。しかし、こうした点は研究上ほとんど問題になりませんし、すでにそれらの対策はMicrosoft社のホームページで公表されています。

次にJustsystem社の一太郎9/10といったワープロソフトやAtok12/13といった日本語変換ソフトですが、登録ユーザーの権限がUSERのまま利用しようとするとうエラーが発生するようです。また一太郎もAtokも、Win2000上で正常に動作させるためには、Justsystem社のホームページから①Justsystem社製品Win2000対応共通モジュールと②各アプリケーション専用のWin2000用修正モジュールをそれぞれダウンロードして実行させる必要があります。

史・資料のノート作成に欠くことのできないエディタソフトでは、秀丸エディタやWz Editorが、Win95/98でも動作させられる最新版（秀丸エディタはVer.3.05、Wz EditorはVer.4.00C）でのWin2000対応をメーカーがすでに発表しています。またデータベース作成ソフトとして前号の『クリオ』でも紹介したファイルメーカー Proは、最新版のVer.5がWin2000に完全対応しています。多言語対応のOCRソフトとして有益な超整理erも、最新のVer.2.04は不具合なくインストールでき、動作もしています。手軽にインターネット上からダウンロードできる電子辞書ソフトDdwinについても、Win95/98版のものであってもインストール・動作ともに何の不具合もありません。

このDdwinなどに読み込ませるような辞書データを作成するために必要な仮想CDドライブソフトについては、若干状況が異なるので注意が必要です。ソースネクスト社の携速は、この3月末にようやく携速2000が発売されたことでWin2000上でも利用できるようになりました。それまでの携速95/98は、Win2000では動作どころかインストールさえできません。同じようにアーク情報システム社のCD革命Virtualは、Ver.3.04以下の製品は全く動作せず、Ver.4以上の製品がアップグレードすることでWin2000に対応できるようです。ウィルス対策ソフトとしては、ウィルスバスター2000はすでにWin2000に完全に対応していますが、それ以前のウィルスバスター98は全く動作しません。Norton Anti Virus 2000については、3月末にWin2000対応モジュールが提供される予定になっているものの、それ以前のバージョンでは全く動作しないらしいです。

このようにWin95/98上で動作していたアプリケーションを実際にWin2000上に導入してみると、ほとんどのアプリケーションがインストールも作業も可能であることがわかります。アプリケーションの導入に際して不具合が起きる場合には、各ユーザーが、インストール作業の実行を認められたAdministrator権限（あるいはPower Users権限）でログオンしていることを確認してください。またWin2000がもつOSのシステムファイルが不用意に置き換えられてしまうことを自動的に防ぐ機能の結果、Win95/98用のアプリケーションの中でも、仮想CDドライブソフトやウィルス対策ソフトのように、インストール時にOSのシステムファイルを書き換えるものは、インストール作業の途中でWin2000がエラーと認識してしまうため導入できない場合が多いこともわかります。このようなアプリケーションはWin2000に対応したものを用意するしか方法がありません。

(2) 多言語環境の構築

このようにWin95/98で動作したアプリケーションのほとんどがWin2000でも動作することが確認できたとなると、これらのアプリケーション上でWin2000の長所の一つである多言語環境が実現されているのか否かが、西洋史研究で有益なOSかどうかを判断する基準になるでしょう。

Win2000における多言語環境の構築は、「コントロールパネル」の中の「地域のオプション」で設定を行います。「地域のオプション」の中に「全般」という箇所があります。その中の「現在のユーザー設定」という箇所では、標準でロケールが日本語に設定されています。標準の言語設定を変更したい場合には、ここを変更すればよいわけです。次に、「システムの言語設定」に表示されている言語の中から使用したい言語をチェックして、ほかの言語を表示させたりするために必要なフォントや入力システムをWin2000に

導入します。ほとんどの欧米系言語の環境は「西ヨーロッパとアメリカ」で対応しています。キリル文字を使用する言語環境については「キリル言語」を、ギリシア語については「ギリシア語」をチェックします。その他にもポーランド語などについては「バルト言語」、ハンガリー語などについては「中央ヨーロッパ」を選択することで対応できます。さらにこの選択画面の下に表示されている「規定値に設定」を選択すると、多言語に対応しているアプリケーションではメニューやダイアログボックスなどの言語が切り替わります。Office2000やWin2000自身も多言語対応アプリケーションなので、オプションのLanguage Packをインストールしてから、設定を行うとメニューなどの言語が切り替わります。

次に「地域のオプション」の中にある「入力ロケール」を開きます。この中にある「追加」を選択すると、文字入力システムに加えたい言語が追加されます。ここでは、ワープロソフトなどに文字を入力する際に使う機能を加えるわけです。追加された言語は、「入力ロケールのホットキー」で、入力の切り替えを左「Alt」キー+左「Shift」キーに設定すると、左「Alt」キー+左「Shift」キーを押すたびに切り替えを順次行えるようになります。また入力言語の切り替えはタスクバー右下のアイコンをクリックすることでもできます。日本語を使用しているときは、日の丸のようなマークがタスクバーに入っています。これをクリックすると、入力ロケールで指定した言語が選択できます。現在使用している言語は、このタスクバーを見ればわかるようになっています。もしタスクバー上に表示されない場合には、コントロールパネルの中の「キーボード」の中に「タスクバーにインジケータを表示する」をチェックすると表示されるようになります。この設定が終了すれば、Wordやワードパッド、Excel、Access、Internet Explorer、Outlook Expressなどで多言語を併存させた入力と表示が可能になります。また各欧米系言語によるキーボード配列がわからない場合には、スクリーンキーボードという機能が追加され、画面上に表示されたキーボードから文字を入力できるようになりました。「スタート」→「アクセサリ」→「ユーザー補助」→「スクリーンキーボード」を選択すると、画面上にキーボード配列が表記されます。この時点で、上述したような入力ロケールのホットキーやタスクバー右下のアイコンを使って入力ロケールを切り替えれば、各欧米系言語のキーボード配列を参照することができます。

(3) 多言語環境の限界

さて第1章第2節でも述べたようにWin2000は、本格的にUnicodeと呼ばれる文字コードに対応したOSです。そして第3章第2節で述べた多言語環境の設定を行えば、理論的にはほとんどすべての欧米系言語と日本語の環境を併存させることが可能になるはずです。確かに、Word、Excel、Accessといったアプリケーションでは、日本語入力と欧米系言語の入力は、入力ロケールを切り替えることによって容易に併存させることが可能です。この機能を使えば、各項目の見出しに日本語を使い、各項目の内容をウムラウトやアクセントなどのついた特殊文字を使うヨーロッパ系言語で記述したデータベースの作成も可能になりました。またInternet Explorerでは、欧米系言語を利用したホームページを表示できるだけではなく、検索サイトなどでのキーワード入力用空欄に対して、入力ロケールを切り替えて文字入力することで、特殊文字を含んだキーワードの検索なども可能になりました。

とはいえ、このような入力ロケールを切り替えるだけで多言語環境を実現できるのは、

現時点では Microsoft 社の製品に限られているという大きな問題があります。というのも、これまでの Win95/98 で動作させていたアプリケーションの多くは、従来の日本語独自の文字コードを利用してアプリケーションが作られていて、Win2000 が採用している Unicode の体系に対応した新しい構造で作成されたものではないからです。ですから、入力ロケールを切り替えただけでは、欧米系言語の特殊文字などを、日本語環境上で表示できないことが、依然として多いです。たとえば、テキストエディタで扱えるテキスト形式の文章は、あくまでも日本語環境では日本語の表示と入力だけができて、入力ロケールを切り替えても従来の Win95/98 と変わらず文字化けを起こすだけです¹⁰。また、Ddwin などの辞書ソフトでも、入力ロケールを切り替えただけでは、検索語の入力欄に特殊文字などを使った単語を入力することはできません。逆に、英語版である EndNote のようなアプリケーションの場合、欧米系言語の入力は入力ロケールの切り替えのみで可能ですが、日本語を表示・入力することはできません。

このように考えてみると、Win2000 で実現された多言語環境は、欧米系言語と日本語を利用する西洋史研究者にとって、現時点では Microsoft 社のアプリケーションを使う以外は、Win95/98 でも実現されていた程度のものであると結論できます。確かに Win2000 では、アラビア語やペルシア語、朝鮮語やヘブライ語などといった特殊文字を扱う言語も、ロケールの設定を切り替えることにより、日本語 OS 上で容易に表示・入力できるようになりました。ですから、こうした言語を扱う研究者にとっては、Win2000 は革新的な OS といえるかもしれませんが、欧米系言語と日本語が利用できればよい西洋史研究者にとっては、それほど革新的な多言語環境とはいえません。ただし、こうしたことは、現時点で用意されているアプリケーションがもともと Win95/98 上での動作を前提にして開発されたものだから Win2000 の多言語環境を十分に生かしきれていないのだとも結論できるでしょう。となると、今後これらのアプリケーションが、Win2000 で採用された新たな体系に従って完全に Win2000 に対応したものとなっていけば、Win2000 の多言語環境のメリットを、西洋史研究者も享受できるようになるのかもしれませんが、Win2000 の実力を実感するには、どうやら時間がかかりそうです。

おわりに

以上、第1章で Win2000 の特徴を、第2章で導入作業の過程を、第3章で実用上の問題を整理してきました。それらの内容を踏まえたうえで、最後に Win2000 が現時点で導入されるべき有益な OS なのかどうかを結論づけておきたいと思います。Win2000 は非常に安定して動作する OS であるにもかかわらず、現時点ではそれに完全対応した周辺機器やアプリケーションの数は限られています。もちろん Win95/98 で動作していたアプリケーションのほとんどは、Win2000 でも動作します。しかしながら、多言語環境にそれらの多くが完全に対応していない結果、アプリケーションの動作は Win95/98 上での動作となんら変わるところはありません。従って、現在 Win95/98 で利用している環境が安定したものであるならば、あえて Win2000 に乗り換える利点はないでしょう。もし、現在利用している Win95/98 の環境が非常に不安定で、なおかつパソコンのハードウェア性能が Win2000 の導入可能な条件に当てはまる場合には、現時点でも Win2000 の安定性・信頼性といった長所を十分に享受できるでしょう。

エラーのほとんど起こらないWin2000の安定した動作環境は、研究作業を確実に行える環境を西洋史研究者に提供してくれるものと思います。しかしながら、それを実現するためには、導入前の綿密な準備作業が必要になります。しかも十分に注意を払って作業を行わなければ、最悪の場合、現在利用している環境が完全に破壊されてしまう可能性もあります。これらの心構えを持った上で、各自が必要としている研究環境をパソコンで実現することが肝要です。パソコンは、各研究者の研究スタイルに応じてさまざまな環境をデザインすることができます。たとえ最新のOSでなくても、各自が必要としている研究作業が実現できれば、それで十分であるともいえます。この文章が、西洋史研究にパソコンを活用したいと考えている方々が各自の研究スタイルを築いていくうえで、ささやかな手助けとなれば幸いです。

《註 釈》

- ¹ 2000年中にWin98を発展させたWindows Millennium (通称 Windows Me) が発売される予定です。これはWin3.1、95、98と発展してきた一般ユーザー向けのOSとしては、最後のものになる予定です。
- ² Win2000には、個人や企業内のクライアントでの利用を対象としたProfessional版、個人事務所などの小規模ネットワークにおけるサーバー利用を対象としたServer版、一般企業の社内ネットワークにおけるサーバー利用を対象としたAdvanced Server版、プログラム開発者などを対象としたDeveloper版があります。本稿では、研究者個人の利用を前提としていますので、Win2000 Professional版の説明を行います。
- ³ この作業領域を、システムリソースと呼びます。DOSやWin3.1では、システムリソースは64Kバイトに制限されています。
- ⁴ ファイルシステムとはHDD上に細かく区切られて記録された情報をOSが管理する仕組みのことです。その代表的なものとしては、FAT (File Allocation Table) が知られています。これは、書き込み方法に応じてDOS以来使われてきたFAT16形式とWin95OSR2以降利用できるようになったFAT32形式に大別されます。前者は最大2Gバイトまで、後者は最大2Tバイトまでのドライブを扱えます。これらとは別にWinNT系OSではNTFS (NT File System) と呼ばれるファイルシステムを使うこともできます。NTFSは、ファイルやフォルダーへのアクセス権や所有権の設定、圧縮・暗号化の設定などができたり、ユーザー毎に使用するディスク容量を制限したりすることができます。しかしNTFSで管理したドライブは、Win95/98やDOSから読み書きすることはできませんので、これらのOSと共存させる場合には、従来のFAT16やFAT32でドライブを管理することをお奨めします。
- ⁵ USB (Universal Serial Bus) は、米国のIntel社、米国のMicrosoft社など7社が共同で、1995年に発表したパソコン用のインターフェイス規格です。それまでは、マウスやキーボードはPS/2ポート、プリンタはパラレルポート、モデムやジョイスティックなどはシリアルポートといったように、周辺機器に応じてパソコン本体への接続口は異なりました。しかしUSBを使うことによってそうした周辺機器は共通のインターフェイスで接続でき、さらにハブを仲介させることによって最大127台の機器を鎖状に接続できるようにもなりました。またUSBは、自動的にコンピュータが周辺機器を認識して設定を行うPlug & Play機能にも対応しており、システムが稼働中でも周辺機器の抜き差しが可能です。
- ⁶ ドライブとは、一般的には「マイコンピュータ」や「エクスプローラ」などから参照できるフロッピーディスクドライブやHDD、CD-ROMドライブなどの記憶装置のことを言います。この際、実際の装置を指す他にも、HDDに関して、あらかじめ論理的に書き込み領域を複数に分割

している場合には、Cドライブ (C:¥) やDドライブ (D:¥) といったようにドライブが表示されることもあります。こうしたHDD内部に論理的に分割された書き込み領域のことを、パーティションと呼びます。

- 7 本来、HDDのパーティション分割の作業は、Win95/98で作成した起動ディスクを使ってパソコンを起動し、DOSプロンプトから「FDISK」を入力して行います。「FDISK」では、OSを起動するパーティションとして「基本MS-DOS領域」を設定した後、それ以外の領域を「拡張MS-DOS領域」として設定します。次に「マイコンピュータ」などで表示される論理上のドライブ名 (D:¥ やE:¥ など) を設定します。これを「論理MS-DOSドライブ」と呼びます。「基本MS-DOS領域」はあらかじめCドライブ (C:¥) として設定されていますので、残りの「拡張MS-DOS領域」の中に「論理MS-DOSドライブ」としてDドライブ (D:¥) やEドライブ (E:¥) などを設定します。こうした一連の作業を経て、HDDのパーティション分割は終了します。ただし、この「FDISK」の作業では、FAT領域が修正されるため、HDD上にあるデータの位置情報が変更されることになります。従って、「FDISK」を行うと、HDD上のデータの位置はOSから全く認識されなくなるのです。ですから「FDISK」を使ってパーティションを分割した後は、それぞれのドライブを再びフォーマットしてOSをインストールする必要があります。これは、それまで保存してきたデータも完全に消去されてしまう作業なので、バックアップなど十分な準備作業が必要とされます。
- 8 キーボードは、英語用のキーボードである101キーボード、日本語用キーボードである106キーボードに大別されます。日本語キーボードで「Windows」キーのついているものは109キーボードと呼ばれますが、Win2000の導入にあたっては106キーボードとして設定してしまつて問題はありません。またWin2000の導入後、「コントロールパネル」の「システム」から「ハードウェア」を選択し、「デバイスマネージャ」で「キーボード」を表記させるとOSはキーボードを「101/102 英語キーボードまたはMicrosoft Natural PS/2 キーボード」として認識していることがわかりますが、これはWin2000の現時点でのバグであつて、実用上なんの問題ありません。
- 9 ログオンは、コンピュータやネットワークなどの資源を使用する場合に最初に行われる認証作業のことで、ログインとも呼ばれます。ログオンするときには、各ユーザー別に設定された「ユーザー名」と「パスワード」が必要となります。この認証を受けた後に、ログオンしたコンピュータやネットワーク内の資源を使用したり、プリンタを共有したりすることが可能となります。
- 10 現時点では、Unicodeの文字体系に応じて、テキストファイル形式でも多言語混在が可能なアプリケーションは、Win2000の「アクセサリ」にあるメモ帳のみです。メモ帳で作成したテキストファイルを、現在のバージョンの秀丸エディタやWz Editor上でUnicode形式に変換して読み込ませてみても文字化けしてしまいます。

〈参考文献〉

“Windows2000 導入チェックガイド”『日経パソコン』(1999 12-13/27号) pp.252-267.

“Windows2000 導入前の基礎知識”『日経パソコン』(2000 2-21号) pp.160-183.

“Windows2000 導入ガイド”『日経パソコン』(2000 3-6号) pp.190-202.

古谷大輔・工藤晶人「西洋史研究者のためのパソコン作法入門」『クリオ』(1998 12号) pp.55-64.

古谷大輔「西洋史研究者のためのパソコン活用入門・実践編」『クリオ』(1999 13号) pp.59-72.

〈参考情報〉

Microsoft Windows2000.com (<http://www.win2000j.com>)

Windows2000.FAQ (<http://www.geocities.co.jp/SiliconValley/2040/w2k/index.html>)

Te-Technology Windows2000 総合目次 (<http://pc-information.com/win2000/>)